シルクロード「海友フォーラム」hp　解説　　2014.5　岡本　洋

「歴史ロマンと強国相克の中央アジア」

シルクロードの要衝・ウズベキスタン探訪の視点

１．はしがき

「歴史ロマンと強国相克の中央アジア」と題してして 2013.10.15　「海友フォーラム」懇談会で Power Point(全 54 駒) および一連の**「ウズベキスタン探訪写真」**と共に発表をした。これは、それに先立つ約２か月前、**「シルクロード珠玉の町、ブハラとタシケントの旅」**というあるツアーに参加したのを契機に纏めたものである。以下はこれらに若干の解説と補足である。

先の発表の要点は、**下記３分野を焦点**にして取り上げたものである。

①　所謂シルクロード ――仏教と関連美術の伝搬、その交易ルートと歴史文化等
②　現在のシルクロード、特に中央アジアの現状―国際情勢、世界強国の確執、資源の争奪など
③　広い意味での東西文明、文化の交流路としてのシルクロードの問題点と論 説

これらについては広い分野にわたり膨大な資料が発表されていて、現在においても今尚研究者により、精力的に資料の発掘と精査研究がおこなわれている。

その中で、私が考古学・文明論としてのシルクロードに加えて、特に注目するのは、

1）地政学的問題――ソ連崩壊後独立した「中央アジア５か国」は、中国の新疆ウイグ自治区と共に「シルクロード・オアシスルート」と重なっていて、現代の国際問題を孕む地政学的な要地としてクローズアップされている事
2）国際エネルギー問題――この地域の豊富な地下資源が「中露欧」エネルギー獲得競争の確執の場となっている事
3）イスラム圏――この地域がイスラム圏であり、世界的紛争危険地帯のフアガニスタンに接している事、

等の複雑な問題を孕んだ地域でもあることを注目する必要がある。。

関連資料の特に古いものは歴史の彼方に埋もれたものが多く研究を困難にしているのは否めない。然し、研究の進展に伴い、関連部族や興亡の繰り返し、民族移動、等の歴史の真相が、勝者ベースの歪曲から次第に明らかにされつつある。

一方で現代においても、同様に強国間の相克が繰り返されているのは、非常に興味深い。

２．世界遺産登録

「海友フォーラム」で私が発表した約７か月になって、今年 2014.5.3 付でユネスコは、**「中国、キルギス、カサフスタン３か国より共同申請された「シルクロードの世界文化遺産登録」の内定し、来る 2014.6.15~25 日　カタールで開かれる世界遺産委員会　で正式決定される見通し」**と発表した。この登録に向けてこれら３か国の動きは知らなかったが、発表に半年先駆けた私の発表が時宜を得たものであった事かもしれない。

因みに、この際、我が国の**「富岡製糸場と絹産業遺産群」**も共に正式登録される予定。

３．東西文明の交流路としてのシルクロード　３つのルート

これについては、日本の「騎馬民族王朝説（現在では学会では認められなくなっている）」の提唱者として有名で、又文化勲章受賞の著名な考古学者・江上波夫（1906~2002）　の解説が明快である。彼は、参考文献「シルクロードと日本」文献　）の冒頭で次の様に述べている――

「シルクロード（絹の道）―英語で Silk Road、ドイツ語で Seidenstraßen、中国語で絲綢之路―は、

一般にはドイツの 19 世紀の地理学者リヒトホーフェンが、内陸アジアを横断・縦貫して、東の中国と西の地中海域を結んだ古代の大陸大幹線路に与えた呼称とされているが、現在ではユーラシアを東西に結ぶ、古代の交易路地帯を総称してシルクロードという場合が多い。そのうちには、内陸アジアの砂漠・半砂漠地帯の隊商都市を連ねた**「オアシスの道」**も、その北に横たわるユーラシアの草原地帯の遊牧騎馬民族による通商路の**「草原の道」**も、またシナ海からインド洋・アラビア海を経由して紅海・地中海に至る**「南海の道」**もふくまれるのである。その意味では、単数表示の Silk Road よりリヒトホーフエンの用いた複数表示の Seidenstraßen の方がより適切であろう」と。

江上は更に続けて、　「然し、それらのシルクロードのうち、飛びぬけてポピュラーなのはやはり**「オアシスの道」のシルクロード（オアシス=シルクロード）**である。このことはひとりこの道が東西交易、・文化交流の場として世界史的意義をもったということばかりでなく、そこに多くの人間を惹きつける特別の何かがあるに違いないとおもわれる。そしてそれは、ここが単なる自然の路でなく、人間が切り開いた道であり、1000 年近くも無数の人が身命を賭して歩いた道であり、またそこに多くの人が最後の夢を託した所であったかもしれないような、**この道と人間との係り合が、他の路とは格段にちがう**からではあるまいか。又この道を考える時、無数の人の姿が自然に顕われては消え、無数の人の声が聞こえては消えるように想いにとらわれるのも、この道で人柱になった人々が少なくないからかもしれない」と述べている。彼の専門の考古学とその延長線に沿った分野中心の解説ではあるが、シルクロードの解説としては略言い尽くしていると言えよう（太字、下線などは岡本）。

４．「シルクロード」とウズベキスタン行き　――　シルクロード取上げ理由

―　(1).潜在的背景、(2).個人的関心、(3). 中央アジアの緊張と緩和　―

4.1.潜在的背景・・・「シルクロード」は江上波夫の言を引用するまでもなく我が国の人気を呼ぶテーマである。一般にそれは、人気を呼んだ「NHK スペシャル放映」の影響が大きく影響しているかもしれない。それは、我が国への「仏教伝来」にまつわる数々の歴史的事実や国民宗教・仏教にまつわる連想を掻き立てたといえる。

第１図　仏教の広がり

①仏教伝来(スライド 12、39 など)――

釈迦(BC624~BC544)によって始まる仏教は東、南に拡散(左図)。BC1 世紀には多分オアシスルートを経て中国に伝来、更に日本には百済王から大和朝廷へ経典が献上された。(538 年・仏教公伝)。その使節の船が上陸地は、大和川を遡った奈良県桜井は初瀬川河畔にある。ここ海柘榴市（つばいち：海石榴市－奈良県桜井市金屋）金

谷河ている。川敷公園には「仏教伝来の地」の碑が建っ正にシルクロードのテーミナルということになる。

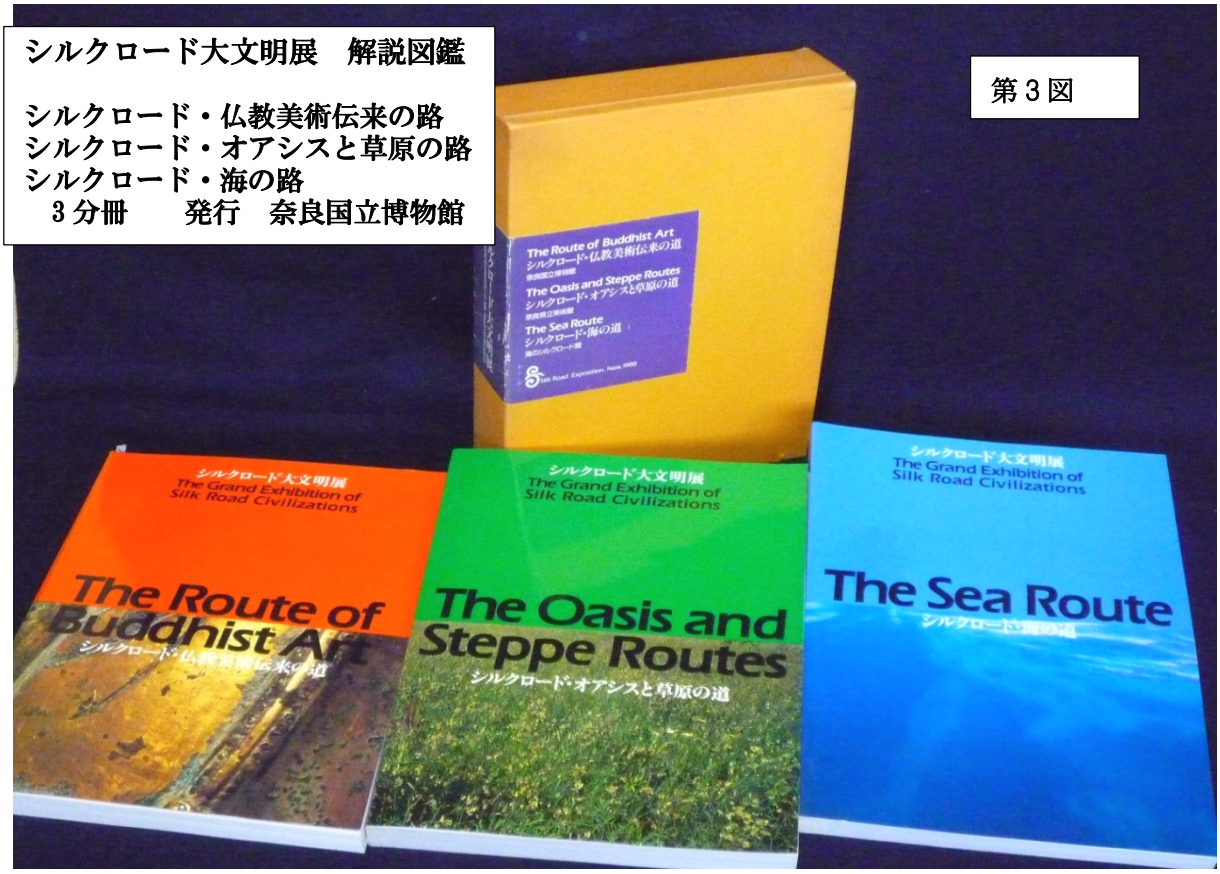
第２図

仏教伝来の地・石碑

②仏教発展のドラマ――この様な歴史的トピックには、日本国民全体が知識・教養・宗教として共有するドラマがちりばめられている。例えば**「玄奘三蔵」**による国禁を犯して出国の末の劇的なインドより多量の経典の中国への持ち帰り(645 年)。これらは**遣隋使(600~618 年、5 回)、遣唐使(630~894 年、20 回)**により仏教を含む広く文化の形で日本に伝えられ大きな影響を与えた事は広く知られている。その間、**鑑真(688~763)の渡来の苦難のドラマ(~753 年上陸)と唐招提寺の建立(759 年)。東大寺金堂完成(751)**とインド出身僧を導師として西域・中国はじめ海外参加を含め１万数千人の参加で国際的な規模で行われた**開眼供養会(752)**の記録も残されているという。

更に最澄(805 年帰国)、空海(806 年帰国)の活躍は夫々比叡山・延暦寺(天台宗)、高野山・金剛峰寺(真言宗)を確立、それを源流とする仏教諸派は発展して全国に浸透発展して、広く我が国宗教世界をリードしている影響力は計り知れないし、日本文化の底辺を形作っているといっても過言ではなかろう。

4.2.主な個人的体験と関心・・・



第３図

シルクロード大文明展　解説図鑑

シルクロード・仏教美術伝来の路
シルクロード・オアシスと草原の路
シルクロード・海の路
３分冊　　発行　奈良国立博物館

①1988年(S63)4月23日から半年間、奈良市平城宮跡と奈良公園周辺を会場として「なら・シルクロード博覧会」が奈良国立博物館主催で開催された。

すでに25年以上前の事になるが、682万人が参加する盛会であったと記録されている。私もその中の一人であった。　この博覧会はS53年に策定された特別史跡平城宮跡保存整備基本構想(文化庁)」の一環として行われたものだが、その後、順次大極殿(2010年)、朱雀門(1998年)夫々復元完成し関連の施設が整備されている。博覧会のテーマは言うまでもなく、シルクロードの終点としての奈良の広範な文化遺産を再認識するものであった。又、

②毎年秋に開催される奈良・正倉院御物展―なら文化遺産登録

ペルシャより伝えられたという光明皇后奉納の装飾品等拝観の度にシルクロードの交易を実感させられる。1998年(H10)12月2日には、「古都奈良の文化遺産」としてユネスコより「正倉院を含む東大寺」他に平城京宮跡、唐招提寺、薬師寺、元興寺、興福寺、春日大社、春日山原始林の 8件が文化遺産に登録された。まさにシルクロード大文明展を集大成するものと言える。

③S15年皇紀2600年(1940年)以来　奈良の体験

S15に初めて斑鳩から畝傍を訪れた。爾来既に半世紀以上、飛鳥から始まり奈良の社寺・古道・山稜と広く渉猟した。

④　特に終戦直後の3年間、略毎週末　親戚の奈良盆地の略中央の笠縫村の古民家に滞在した経験は無形の財産で、裏の近くには飛鳥川が流れているなど、古代歴史を身近に感じるに十分の雰囲気であつた。

⑤ 2003年(H15)には中国の揚州を訪問して鑑真が渡日まで居た大明寺を訪ねた。又、

⑥ 2005年(H17)には薩摩半島西端の秋目浦の鑑真上陸地をたずねることができた。更に

⑦P.Point スライド32に示す「再見　マルコポーロ「東方見聞録」シルクロードを行く」（National Geographic刊）は、手元に置いて見るたびにシルクロードへの旅を大いに掻き立てられた。

4.3. シルクロード終点と標榜される正倉院

正倉院には約9千点の宝物がおさめられており、奈良時代・天平文化の精華が1200年以上わたり保管されている。756年、聖武天皇崩御の49日忌に光明皇后が聖武天皇ゆかりの品々を東大寺大仏に献納したことが正倉院御物の起源とするこれらの宝物は、日本製品、中国(唐など)や西域、遠くはペルシャなどからの輸入品を含めた絵画・書跡・金工、木工、刀剣、陶器、ガラス器、楽器、仮面など、古代の美術工芸の粋を集めた作品が多く残るほか、奈良時代の日本を知るうえで貴重な資料である正倉院文書、東大寺開眼法要に関わる歴史的な品や古代の薬品なども所蔵され、文化財の宝庫である。シルクロードの東の終点でもあると言うロゴが公式文書によく用いられている。

4.4 中央アジアの緊張と緩和―シルクロードへ

2001.9.11アメリカ多発テロ事件で一躍中央アジアは国際的に注目を集めることになる。又ソ連崩壊後のソ連邦から独立(1991.9.1)した「カザフスタン、ウズベキスタン、トルキスタン、キルギス(中国に接する)、トルクメニスタン(同)」の中央アジア5か国は政治・経済・軍事について各国の関心を引く状態となる。紛争もそれなりに起こる不安定な状態が続いていた。勿論この地は、古来のシルクロード・交易都市としての旅行先として有名だし、青の都―ブルータイルに輝くモスクとて喧伝される。食指を

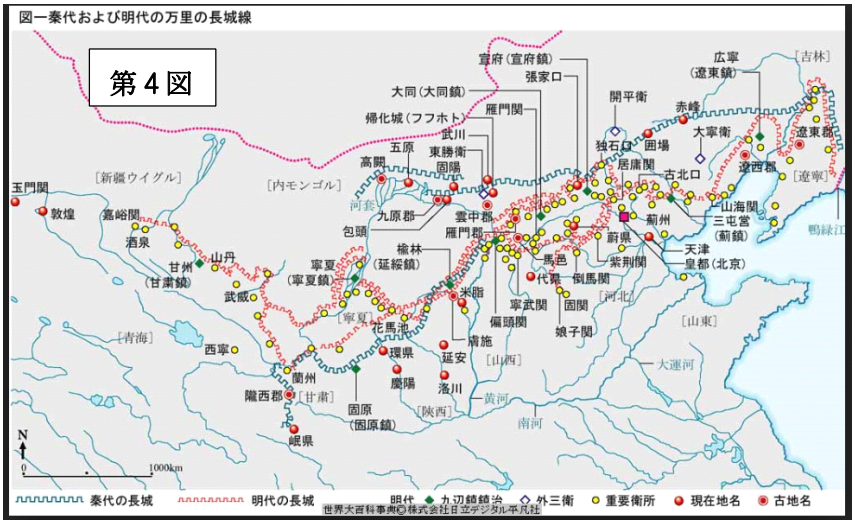
惹かれる地域だ。一方、イスラム・パワー台頭を現地にみることにも惹かれる。ようやくウズベキスタン訪問となる。

5．中国域内のルート　――　スライド 3~11

5.1　万里の長城、河西回廊、チベット高原――洛陽、西安(長安)からローマ、ビザンチンに向けて西に向かう交易ルートは万里の長城の南側を行く。

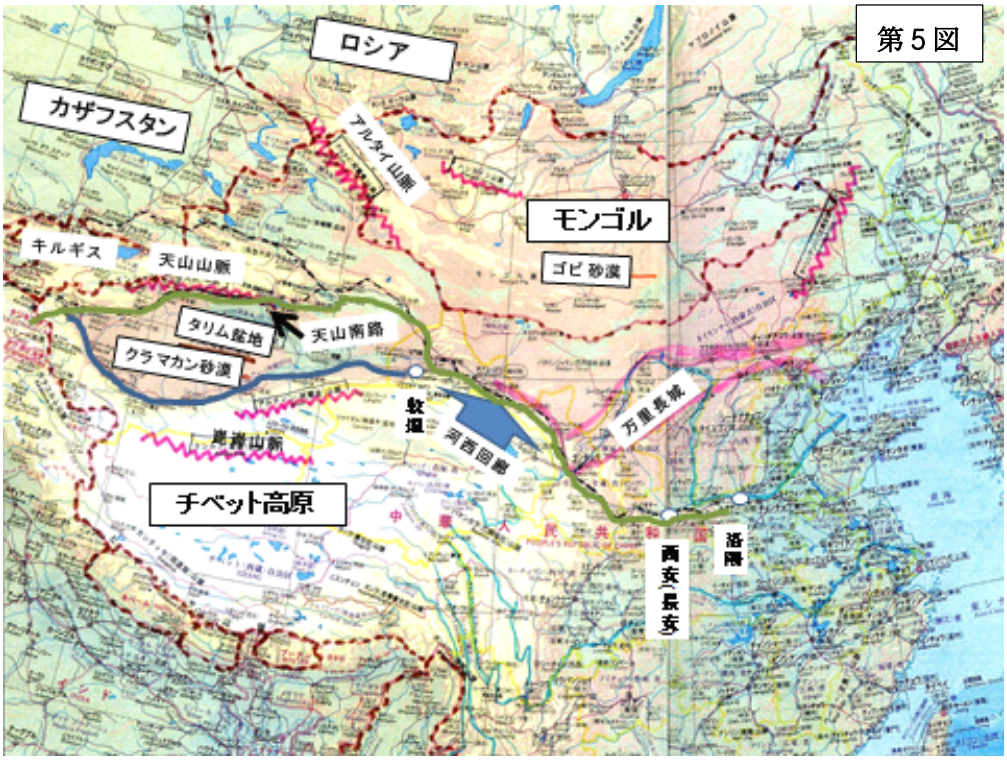
ここがチベット高原の北端との間の河西回廊と言われる谷筋である。

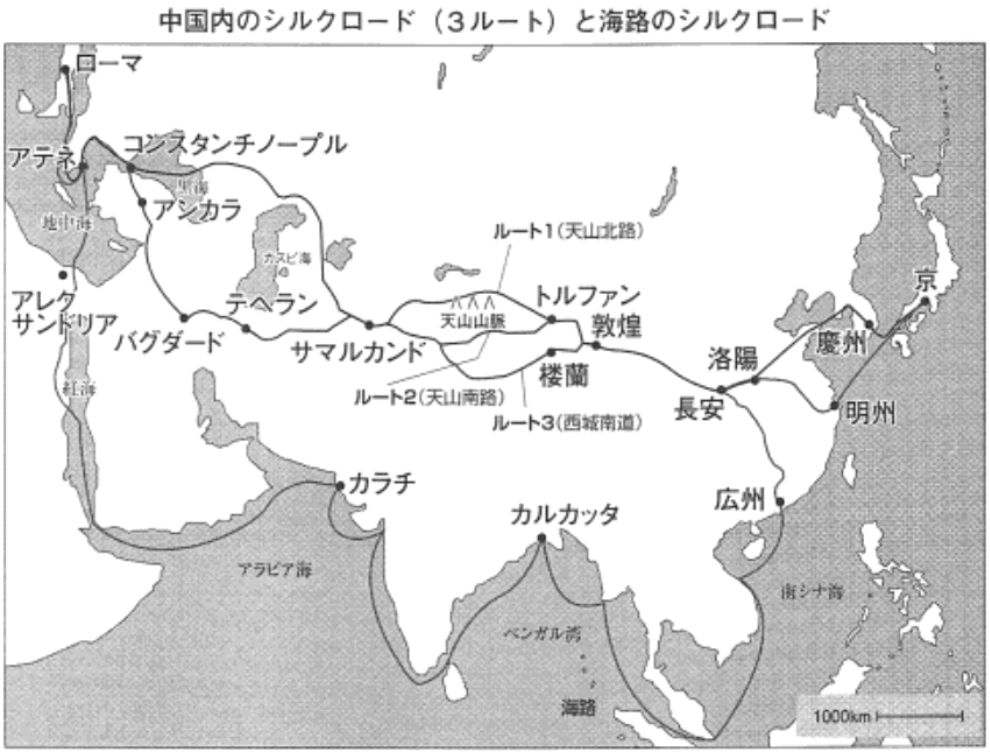
現存する万里の長城は明代のものというが、既に紀元前から作り始められて、色々のルートで造られてきたものである。



5.2　河西回廊・敦煌――洛陽、西安(長安)から発して河西回廊を西進してからタリム盆地に入り、天山山脈の南側をタクラマカン砂漠を左手にしながら西進する（天山南路・次図参照)。

<u>全長 900km とされる河西回廊</u>の西端は玉門関でその南西 80km に古代オアシス都市として栄





えた**敦煌**がある。ここより更に、チベット高原の北縁に沿いタクラマカン砂漠・タリム盆地の南縁を西に進むのも古来より敦煌の繁栄をもたらしたオアシスルートである(スライド 30)。

6．シルクロードのルートと交易

↑http://www.east-site.com/silk-road

6.1　ルート――6-14 世紀西欧と中国の間には数千の交易シルクロードが存在した。15 世紀の大航海時

代を迎えるまでその役目を担うことになる。

6.2 オアシスルートがメインだが、これは中国の中原(黄河中下流域)の宮廷社会を中心とする交易品の生産・需要が圧倒的に大きかったために違いない。地形的には困難度の高い交易路としても、北方の匈奴などの危険からの安全度の高いこのルートが多用されたものと考えられる。

6.3 ステップルートのメインの交易商品は栗本によると、クロテンの毛皮でこれも絹に匹敵して金より高価に取引されたという。栗本はこちらの方がオアシスルートよりメインだという持論を展開するが、多分このルートの主役は匈奴勢力に近い北方騎馬民族かそれと協調関係にある集団に限られたのではないかと思われる。このステップルートはアルタイ山脈の南のほか北にもあったという資料がある。渤海、契丹など中国メインランドとの非友好国は勢いこのルートを利用したと思われる。

6.4 交易

中国 からローマに至る交易の最大の商品はもちろん中国のシルク。絢爛たる繁栄と爛熟した生活にあつたローマでは、しなやかに光る悩ましくも身にまつわりつく絹とその織物は熱狂的に迎えられた。クレオパトラもその一人だったという。

他の多くの高級品は、絹のほかにも磁器、毛皮、スパイス、宝石やアジアの他のエキゾチックな製品で、火薬、紙など中国の発明による特産品だつた。西側からは中国へ化粧品、銀、金、琥珀、象牙、カーペット、香水、ヨーロッパ、中央アジア、アラビア、アフリカからのセラミックスが運ばれた。

7．シルクロードの開設・発展・衰退　――　年表(スライド 12)、スライド 13 参照

7.1　開設――シルクロードの開設は漢の武帝によるというのが定説。前漢の第 7 代皇帝・武帝は紀元前 141 年 3 月 9 日に即した。前漢は代々北方の匈奴に毎年貢物をする従属の立場にあった。武帝は、この屈辱状態を克服するため長年の苦労とドラマの末に、遂に念願を果したことにより歴史に名を残すのだが、これによつて蘭州からタリム盆地一帯に勢力を張っていた匈奴の影響を押し返し西方への回廊の確保に成功する。とは言え、それ迄はこの地を含めて広く支配していた匈奴は既に東西交易の大きな利益を得ていたわけで、その利益をようやく我が物にすることに成功したわけで、東西交易自身を武帝が開設したわけではなかろう。ただ中国メインランドと西域との「交易路の一貫したシステムと安全」が曲がりなりにも確立することになつたという面で評価されるのであろう。勝者の歴史というべきか。

7.2　南シナ海への進出――我々は、「海のシルクロード」にも関心が深いのだが、漢の武帝は上記の北部に限らず、「中国南部から南シナ海にも進出」したとされている。この故事が「現代の中国の南シナ海 9 段線」のルーツともいわれる説が中国側情報として洩れ伝えられる。然し、「世界史年表・地図　亀井高孝他、吉川弘文館」等をを調べる限りでは、武帝時代の版図南端は N15°（ベトナム北中部)程度に止まっていて、「9 段線」の極く北端部に達しているに過ぎない。

因みに、「9 段線」は中華人民共和国が 1950 代以来南シナ海に中華人民共和国が権利を主張しているという範囲を示す「9 dotted line」の事で、南シナ海の略全域をカバーしている。根

拠が漢の武帝以来とか、元の最大版図とか言われるが、由来の根拠を確認することできない。

7.3　汗血馬――上記の武帝の西方進出は、武帝がフェルガナの名馬を熱望したことでもよく知られている。フェルガナは現在のウズベキスタン東端の地域(漢代には大宛ﾀﾞｲｴﾝ)で名馬の産地として有名。それは汗血馬(カンケツバ)と言われ,「血の汗をかき一日千里を駆ける」名馬として珍重された。中国本土の馬の改良には長い年月を要することから、強力な匈奴に立ち向かうには、新兵器ならぬ名馬での戦力アップに大作戦を展開したこととなる。 紀元前 101 年、武帝は 5 万もの大軍で李広利将軍を派遣、毎年かの地の馬の供給させる約束を獲得して、数千等の馬をつれて凱旋の成果を得たという。ここに至るまでには涙ぐましいドラマが展開している。

このときに到来したェルガナの「汗血馬」、「天馬」を称えた歌が残されている。

「天馬来たれり、　西のはてより、　万里をこえて、　有徳に帰す
　霊威をうけて、　外国を降し、　流砂をわたりて、　四夷服しぬ」　　「史記(楽書)」

――――長躯ヨーロッパの西の果てモスクワの先やペルシャ湾まで席巻した草原の覇者・機動軍団モンゴル軍の機動力や、高倉健の主演　中国映画(2005.12 中国公開)　「単騎、千里を走る」の事が思い出される。

7.4　シルクロード世界に登場する覇者、事件、名士――スライド 12

1)　漢の武帝　上記、

２)ジンギスハーン　――中国全土を含めて広域ユーラシアを支配したモンゴル。反面交通路とその安全が確保されて、東西交易に貢献（スライド 48）

3)ウズベキスタンの英雄・チムール(在位 1370.4~1405.2)――ウズベキスタン・サマルカンド近郊生まれのチムールは広大なチムール帝国を建設した。(スライド 49)、

4)タラス河畔の戦い(751 年 5 月)――イスラムと唐の天下分け目の戦い

現在のキルギス中部のタラス川のほとりで、中国西部に駐留する唐軍と、北アフリカから中央アジアまで支配のイスラム帝国(アッパース朝)との「天下分け目の戦い」と言われる戦争。アッパース朝 20 万、唐軍 3 万(10 万?)。この戦いで唐軍は数千を残すのみの惨敗。以後この地域はイスラム勢力圏として定着。この敗戦によりこの地のみならず西域のイスラム支配が確立したともいわれる。

５)紙の製法、西世界に伝わる――古代における最大の技術流出か

タラス河畔の戦いにおける唐軍の惨敗により、その捕虜の中にいた製紙職人から技術が流出したと言われる。

5)玄奘三蔵、その他、

６)隊商マネージとして活躍のソグド人(スライド 33、34)

7)遣隋使、遣唐使、最澄、空海などの留学僧

８．再見　マルコポーロ「東方見聞録」　――　シルクロードを行く―シルクロード憧憬

(National Geographic　刊行図書と DVD)・・・・・・　スライド　31、32

8.1「マルコポーロは本当に中国に行ったのか」――

一部の専門家は単なるフィクションだという。大英博物館の中国部主任フランセス・ウッド博士は 1996 年にこの題名で出版した著書の中で、マルコは中国を訪れていなかったと明言しているという。我が

日本を「**黄金の国ジパング**」**の名で**世界に広めた本として余りに有名だが、眞實はどうか。このテーマに挑戦した記録である。

「再見　マルコポーロ「東方見聞録」」
（鄭和の大航海と DVD2 枚の 3 部が 1 セット。右図）⇒

第６図

2002 年 12 月　に National Geographic より刊行されたこの本は、日系カメラマン・マイケル・ヤマシタが同社との契約で、マルコの旅行全行程を単独で実地にたどって主題テーマに挑戦した写真紀行の記録である（この他、鄭和も海のシルクロードとして対象となつているる）。

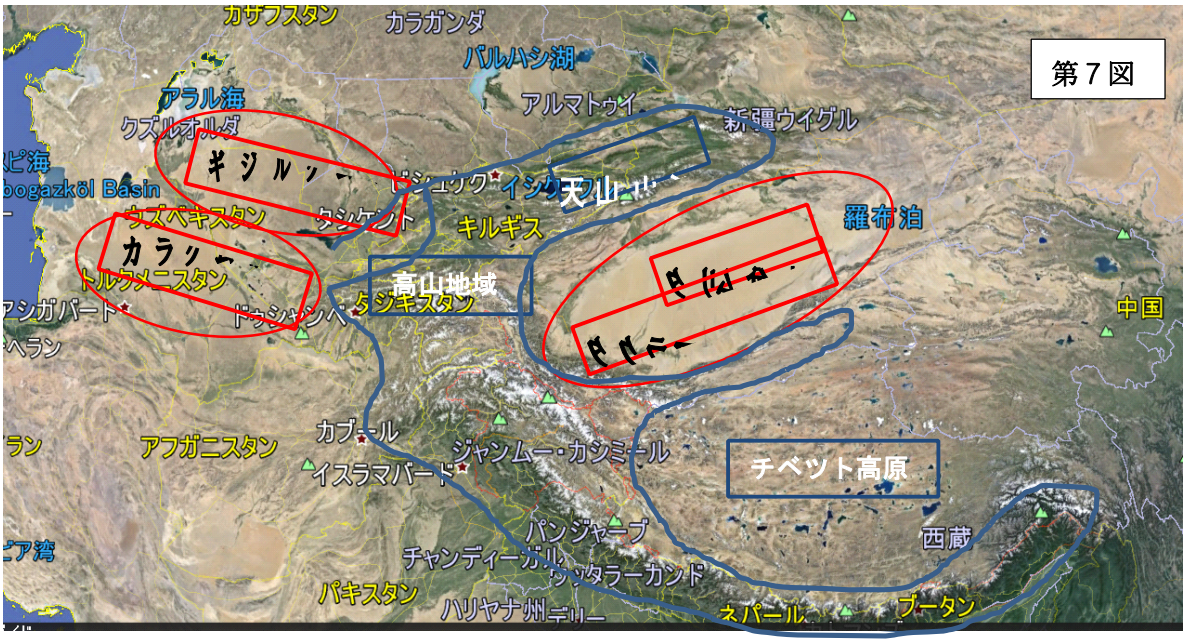
現地に直接足を運んだ者の直観として、彼は「マルコの真実を確信した」と結論している。題名に示す「シルクロード憧憬」をそそるに十分である。因みに

8.2 ウツド博士のフイクション説の要点――

大要は次の通り。「有名な官僚国家で、あらゆる記録を残してきた古代中国にかかわらず、マルコの記録が中国に残されていないこと。西欧人のマルコの注目を惹くはずの次の記述がない。万里の長城、箸の使用、纏足の習慣等」。ところで、1271 年に 17 歳のマルコは、父と叔父に同行してヴエネチアを出発、中東・中央アジア・パミール高原から中国にはいり、上都（現モンゴル自治区中東部）に到着し元の皇帝フビライに謁見。その後 20 年近く顧問として中国を広く旅行した後、海路ヴエチアに帰国したのは出発から 24 年後の事とされる。彼の後述に基づいて作られた**「東方見聞録」の原本は現存しない。**

9．オアシス都市・国家と砂漠　――　スライド　6~9、38　等

9.1　砂漠――　次ページの広域 Google 画像で見る通りここで問題にしている地域に緑は極めて少ない。中国域では新疆ウィグル自治区の大部分を占めるタリム盆地とそれを覆うタクラマカン砂漠、カザフスタン、トルクメニスタン国の夫々を覆うキジルクム砂漠とカラクム砂漠が代表される。然し、それらに挟まれる中央部は世界の屋根ヒマラヤに繋がる 7,000m に達するような高山地帯で



雪と氷河に膨大な水が貯えられていて、冬季を除けば豊富な水を供給する。その涌出地域がオアシスとなる。古来この地域は厳しい環境ながらオアシスを中心に古代から人が住み着いてきたとされる。例えば、カザフスタンの首都タシュケント、ブハラ(スライド９)　の街路樹、公園の緑と水路の流水の多さには驚かされる。　　更にこれら地域を流れる主要河川の流域面積はスライド８に示すように

第８図　　国土面積と砂漠面積の割合　　参考　日本国土　37.8 万㎢

国名	国土万㎢	砂漠　名	砂漠万㎢	砂漠面積比
中国(ﾀﾘﾑ盆地)	56	タクラマカン	33.7	0.602
ウズヘキスタン	44.7	ギシルクム	29.8	0.667
トルクメニスタン	48.8	カラクム	35.0	0.717

第８図　タシケント市内の街路樹 2013..8.25

←ウズベキスタン・スライド 18 も併せて参照。

7.2 オアシス都市のオアシス

例えば、ウズベキスタンの有名なオアシス都市ブハラには町の中に綺麗に石で区画された、30m 四方程度の「**ラビハウズ**」と呼ばれる水をたたえた池があり、市民の憩いの場となっている。古くは市内に 200 近くもあり水の都とよばれた。

ソ連時代にほとんどが埋められてしまって、現存するハウズは６つだけが名残をとどめ、昼夜市民があつまっている(右の第９図)。

第９図　ブハラのラビハウズ

１０．砂漠の大河、水利、灌漑　――　スライド８

第９図　砂漠の大河

国名	河川名	長さ km	流域万㎢
中国(ﾀﾘﾑ盆地)	①タリム川	2,030	43.5
	②ホータン	650?	
ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ/ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ	③シルダリア川	2,860	64.9
ﾄﾙｸﾒﾆｽﾀﾝ/ｳｽﾞﾍｷｽﾀﾝ	④アムダリア川	2,500	46.5

これらはすべて内陸水路。②は雪解ける雪解けの６月初めから９月下旬のみ砂漠に現れ①タリム川に合流。①はタリム盆地東端のノフーノール湖に注ぐ。然し、最近は湖に到達することなく砂漠に消える。又③④は西流してアラル海に注ぐ。ここでも事情は同様で、戦後のソ連時代綿花の栽培促進のため過剰な灌漑が進められたためアラル海への流入は極度に減少、アラル海(塩湖)そのものの蒸発量より流入は少なく湖は減少を続け一部は砂漠化している。これによる塩害、砂嵐しなどによる周辺環境の急変は「２０世紀最大の環境破壊」ともいわれていると報告されている。。

然し、ウズベキスタンのオアシス都市およびその周辺には運河、灌漑水路、貯水池等がはりめぐらされて旅行者にはまさにオアシスを体験なさせるに十分である。

１１．中央アジア諸国の地下資源

これら国々は地下資源が豊富に存在している。以下はその概要

11.1　中央アジア　各国の概要　　第１０図　↓

国名	カザフスタン共和国	ウズベキスタン共和国	キルギス共和国	タジキスタン共和国	トルクメニスタン
面積 対日本比	272 万 k ㎡ 約 7 倍	45 万 k ㎡ 約 1.2 倍	20 万 k ㎡ 約 0.5 倍	14 万 k ㎡ 約 0.4 倍	49 万 k ㎡ 約 1.3 倍
人口*	1,557 万人	2,710 万人	552 万人	722 万人	675 万人
GDP*	1,049 億ドル	224 億ドル	GNP 37 億ドル	GNP 37 億ドル	262 億ドル
GDP / 人	6,748 ドル	830 ドル	GNP713 ドル	GNP578 ドル	5,052 ドル
主要産業	農業、石油、 鉱業、製鉄	鉱業、農業、 天然ガス	農業、畜産業、 鉱業	鉱業、天然ガス、 農業	天然ガス、石油、 農業
鉱業主要生産物	原油、ウランクロム、 石炭、銅	天然ガス、石油、 金タングステン	金、アンチモン 水銀	天然ガス、金、 亜鉛、アンチモン	天然ガス、石油

*JETRO2008 に基づく

↑「中央アジア地域の資源開発と 環境」西川有司　日本メタル研究所財研究所より

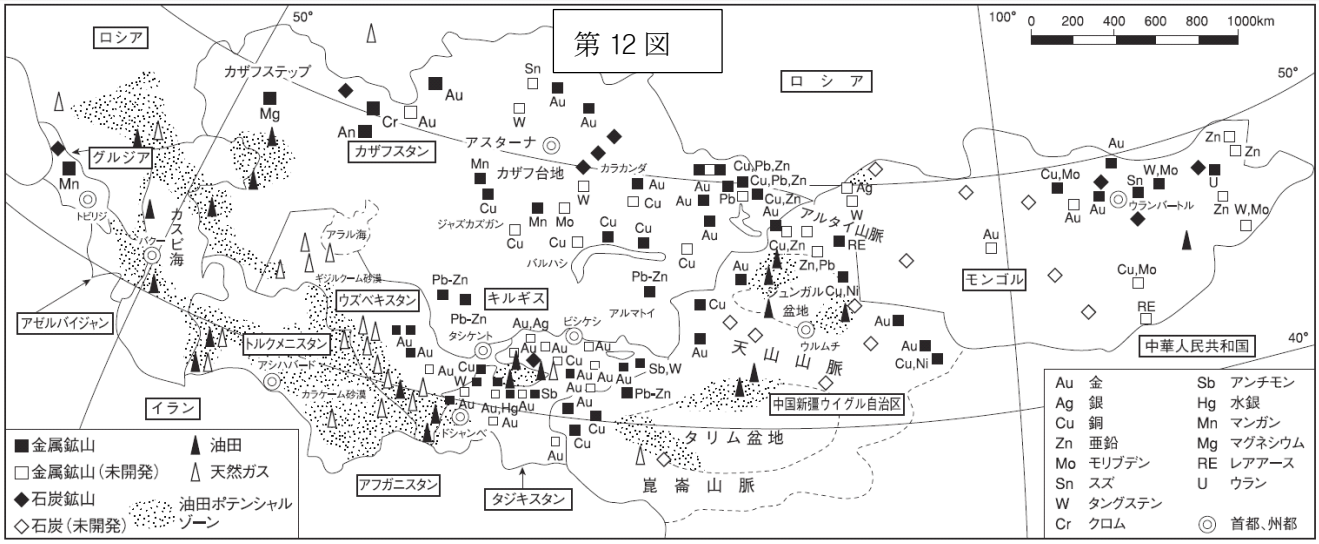
中央アジア・カスピ海主要国　概観　第 11 図　JOGMEC　2

国名	アゼルバイジャン	カザフスタン	トルクメニスタン	ウズベキスタン
人口[1]	850万人	1,550万人	500万人	2,780万人
経済規模[2]	464億ドル	1,322億ドル	262億ドル	279億ドル
一人当たりGDP[2]	5,349ドル	8,502.1ドル	3,863ドル	1,026.7ドル
石油				
消費量[3]	7万b/d	23万b/d	12万b/d	11万b/d
生産量[4]	91万b/d	155万b/d	21万b/d	11万b/d
確認可採埋蔵量[5]	70億バレル	398億バレル	6億バレル	6億バレル
未発見埋蔵量[6]	92億バレル	247億バレル	136億バレル	6億バレル
天然ガス				
消費量[3]	93億立米／年	206億立米／年	190億立米／年	487億立米／年
生産量[4]	147億立米／年	302億立米／年	661億立米／年	622億立米／年
確認可採埋蔵量[5]	1.2兆立米	1.8兆立米	7.9兆立米	1.6兆立米
未発見埋蔵量[6]	1.9兆立米	2兆立米	5.8兆立米	0.4兆立米

[1] 2008年, 国連人口基金
[2] 2008年, IMF
[3] 2008年平均値、BP Statistical Review of World Energy, June 2009
[4] 2008年平均値、BP Statistical Review of World Energy, June 2009
[5] 2008年末時点、BP Statistical Review of World Energy, June 2009
[6] 米国地質調査所2000年調査結果(USGS2000)

参考:日本の消費量(2008年)
石油:485万b/d
ガス:937億立米／年

Japan Oil, Gas and Metals National Corporation



中央アジアの鉱物・エネルギー・鉱物資源分布図

↑↑「中央アジア地域の資源開発と 環境」西川有司　日本メタル研究所財研究所より

１２．その他

12.1　ソグド人　　スライド　33、34

ソグド人は唐代には中国社会に深く融合していた。中国文献に登場する「胡人」は一般には河西回廊

以西のイスラム人を広く指していると言われるが、正確には「ソグド人」を指すとのしてきがある。

涼秋八月　蕭關の道 りょうしゅうはちがつ　しょうかんのみち	北風吹斷す　天山の草 ほくふうすいだんす　てんざんのくさ
崑崙山南　月斜めならんと欲す こんろんさんなん　つきななめならんとほっす	胡人月に向かって　胡笳を吹く こじんつきにむかって　こかをふく
胡笳の怨み　將に君を送らんとす こかのうらみ　まさにきみをおくらんとす	秦山遙かに望む　隴山の雲 しんざんはるかにのぞむ　ろうざんのくも

今やすず風の吹く秋8月、君が行くであろう蕭關の道には北風が天山の草を吹きちぎらんばかりに吹きまくっているだろう。

また、崑崙山の南に月が傾きかける頃、胡人が月に向かって胡笳を吹きならすであろう。

今その胡笳の悲しい調べをはなむけに君の門出を送ろう。ここ秦山あたりから君が赴く隴山にかかる雲をながめながら。

これは、胡人が登場する唐代の漢詩の一節であるが、胡人が長安の官僚社会に身近な存在であったことを伺わせる一つの証左と考えられる。748 年の詩で、作者は岑參(715~770、最後は四川省知事)が、書家としも有名な顔真卿が観察御使として河隴には県された時の詩(石川忠久)。

12.2　シルクロード世界遺産へ内定

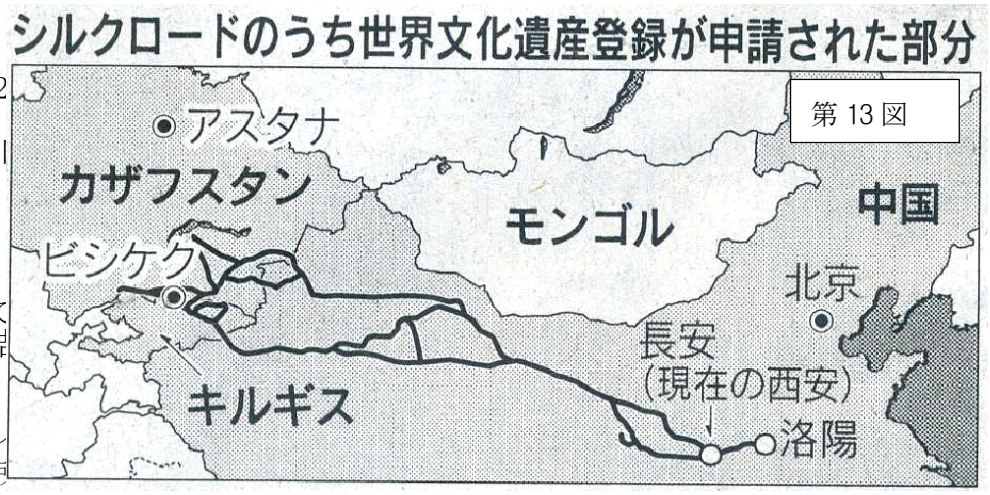
2.節で述べた事項の補足。

1)　2014.05./03　21:02
【共同通信
概要申請されたのは

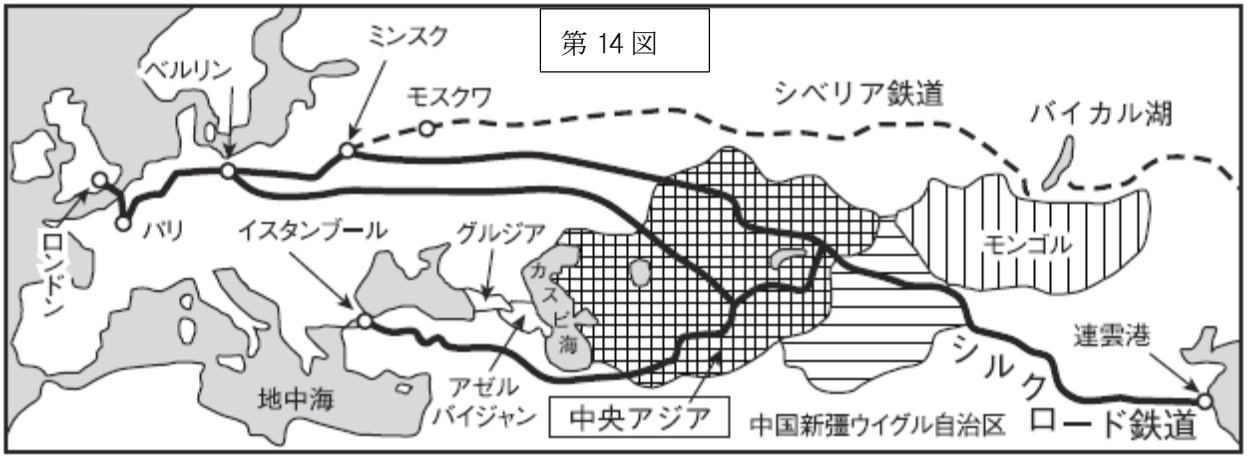
長安（現在の西安）や洛陽から

諮問機関の説明て
かけて各都市を結

2)　2014.5.3　21:21
構成要素は玄奘三蔵が
など中国国内の２２カ所
諮問機関は「当時のシルクロードの繁栄ぶりを示し、人的交流や思想伝達の役に立っていたことも分かる」としている。（共同）



12.3　現在の鉄道ルート



現代の土木技術により旧さばく地帯にも鉄道が敷設されている。　　（終わり）

主要参考文献

「世界史年表・地図」　亀井高孝・三上次男、林健太郎・堀米庸三編　吉川弘文館　2006.4.1
「日本史年表・地図」　「児玉幸多編　吉川弘文館　2006.4.1
「堺屋太一が説く　チンギス・ハンの世界」講談社学研究所芸部出版部　2006.2.10
「地球の歩き方・中央アジア　サマルカンドとシルクロードの国々」2013~14 年
「中央アジアで存在感を増す中国」2013.9.23　日経ビジネス　「イスラム・パワー」特集
「中央ユーラシアを知る事典」小松　久雄他編集　平凡社 2005.4
「シルクロードの「青の都」に暮らす」サマルカンド随想録　胡口靖男 2009.11.30 同時代社
「シルクロードの中継点・ウズベキスタン滞在記」矢島和江
「考古学が語るシルクロード史」中央アジアの文明・国家・文化　ｴﾄﾞｳﾞｱﾙﾄﾞ・ﾊﾄｳﾞｪﾗｾﾞ
　著加藤九祚訳　　2011.5.21　平凡社
「ユーラシアの交通・交易と唐帝国」四千年の東西交易　荒川正晴
「シルクロード歴史と今が判る事典」大村次郷　岩波ジュニア新書
「シルクロード・オアシスと草原の道」・・┐シルクロード大文明展(19884.24~10.23)
「シルクロード・仏教美術伝来の道」・・・│　寄稿・図鑑　等の 3 部作
「シルクロード・海の道」・・・　　┘　　奈良県立博物館・ならシルクロード発行
「シルクロードの経済人類学」日本とキルギスを繋ぐ文化の謎　栗本慎一郎　東京農大出版会　2007.8.1
「東アジアの中の日本古代史」田村園澄　吉川弘文館
「シルクロードの歴史紀行」砂漠の彼方・遺跡と辺境へ　田中信義　K.Kﾛﾝｸﾞｾﾗｰ　2010.11.1
「中央アジアを「平和と安定の回廊に」H18(2006)6.1　外務大臣麻生太郎　日本記者ｸﾗﾌﾞ
「中央アジア地域の資源開発と環境」西川有司　日本メタル経済研究所
「NHK 漢詩を読む」下、李白、その他　　石川　忠久　昭和 60.10.1、昭和 62.4.1、昭和 63.4.1
「再考仏教伝来―仏教へのいざない」東京大学仏教青年会　　朝日新聞社
「ウズベキスタン共和国」　外務省　http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uzbekistan/

以上